

学びの知恵を働かせる授業づくり

我が国は、経験主義的知識獲得を特徴とし、その習得過程において「暗黙知」の移転が卓越していたといえます。すなわち、教える側は多くを語らず、教える側の姿を観察することによって、教わる側はその姿から経験主義的に知識を獲得するものでした。

したがって、言語化して知識を移転するというようなコミュニケーションが恒常的にみられるわけではなく、この過程において「形式知」の移転は顕著とはいえませんでした。知識の表出化に我が国独特の流儀があり、「黙して語らぬ」ことが美德とされてきました。

これまでの我が国は、先のみえる社会であったために、決められた知識を予め備えていれば将来が保障されていたといえます。教える側は先達が築き上げた知の財産をそのままに伝授しさえすればよかったのかもしれませんが。「どうしてこのことを学ぶのですか？」と教師が問われたら、「黙って私のいうことを聞いていればよい」と諭し、信じさせて学ばせるといったように、活用場面の想定なき知識の習得であっても、その活用場面が将来登場するような社会であったともいえます。

しかしながら、今日の社会では、グローバル化などさまざまな社会的構造変化によって、先のみえない社会へと変貌いたしました。このような中にある教育は、現在と変わらない将来が訪れると盲信することを前提とせず、将来の状況をシミュレートすることによってそれに適合した知識は何かを精査し、いかにそれを習得させるかということが重要であります。

そこで、将来において活用される場面を明確に設定し、その場面において求められる力とは何なのか定めることは教える側の責務といえましょう。「暗黙知」の移転だけに精力を傾注することなく、さまざまな言語活動によって、活用することを前提とした「形式知」化された知識の移転である学習でなければなりません。OECDにおいて確固たる地位を我が国が維持するためには、PISA型学力も具備することが課せられています。

もっとも、このことは我が国においてこれまで蓄積された教育の財産を反故にするということではありません。我が国には崇高な暗黙知の所産ともいえる「知恵」というものが存在します。「不易と流行」を視野に入れ、活用度を高める授業に必要なものは、まさに「学びの知恵」ではないでしょうか。

巷では、「習得－活用－探究」という言葉だけが闊歩し、現場ではその定義づけに翻弄され、肝心の授業への具体化が遅々として進んでいないのが現状であります。今や具体的な授業論の展開が喫緊の課題といえましょう。

「学びの知恵」を素通りすることなく、真摯な姿勢でこれに立ち向かい、これを解剖する時期がいよいよ我が国にも到来しました。授業という具体的レベルにおいて「学びの知恵」の解剖と「学びの知恵を働かせる」授業づくりの処方箋を提示することが急務であるという社会的要請を受け、本校では「知恵」という漠とした概念を授業レベルにまで下ろし実践の提案をいたします。

本書の刊行に際しましては、原榮一先生をはじめとする諸先輩方からご支援を賜り、また明治図書の樋口編集部長からは特段のご高配を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

「知識の持ち腐れ」をならない日本人を創るための教育を目指し、ここに本書を上梓いたします。

平成 21 年 3 月
福岡教育大学附属久留米小学校
校長 石丸 哲史